

歴史を語る建物たち

第9回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧国立倉庫（酒田市）



JR酒田駅から、酒田港に向かって羽越本線貨物支線（通称・酒田港線）が伸びている。そして、港に近い支線沿いに、有刺鉄線で囲まれた巨大な建物群がある。

平成4年まで米の貯蔵庫として使われた、旧国立倉庫である。

光丘から続く「公益の精神」

江戸時代、酒田は米の積出港として発展し、河村瑞賢（1618-1699）によって西廻り航路が開拓されると、酒田の町はますます繁栄した。それは、当時「東の酒田 西の堺」と称されたほどであり、井原西鶴の『日本永代蔵』にもその繁盛ぶりが描かれた。

明治以降も酒田は米の集散地として重要な役割を果たし、明治26年に酒田米穀取引所が開設されると、その付属倉庫として、現在は酒田を代表する観光スポットでもある山居倉庫が誕生した。

その後、米の需給バランスによって米価が大きく変動するようになると、政府は、国民生活を安定させるべく、全ての米をいったん買い上げた上で売却するこ

とを決定した（大正10年に、それを定めた米穀法が施行）。そのために、買入米を貯蔵する政府直営の倉庫が建設されることになった。

その際、東北地方にも1カ所設置することが決まり、各地で激しい誘致合戦が繰り広げられたが、最終的には、先述のような“米都”伝統の力を持つ酒田に決定した。そして、本間家が約12,000坪の敷地を政府に寄付



昭和2年当時の国立倉庫。敷地内には線路が敷かれ、酒田港まで貨車で米俵を運んでいた。

資料：ふるさとの思い出写真集（明治・大正・昭和）「酒田」

した。かくして、大正15年に6棟の倉庫が竣工された。
なお、本間家3代目当主光丘（1732-1801）は、私財を投じて庄内砂丘に植林（砂防林事業）を行ったことで名高いが、国立倉庫建設の敷地を寄付した8代目光弥（1876-1929）もまた、公益の精神によって国家の発展を願ったのであろう。

堅牢強固に隠された工夫

国立倉庫は鉄筋コンクリート造りの平屋建てで、天井までの高さは6.4m。天井の上には、鉄筋コンクリート板に銅板瓦が敷かれた屋根がある。また、壁の厚さは40cmもあり、外部の温度や湿気の影響を防いでいる。入り口の扉は三重で、まるで要塞のように堅牢強固な造りとなっている。

一方で、床面には木煉瓦が敷かれ、壁には木枠が張られている。これは、床や壁のコンクリートで米俵が傷つかないようにするためであり、頑丈な造りの中にもこうした細かい配慮が施されている。

倉庫の収容能力は10万石、最大で20万石といわれたが、太平洋戦争によって日本の戦況が悪化してくると、国立倉庫の米もなくなり、軍事用の缶詰があるだけとなった。倉庫内では酒田日満工業学校の生徒が特殊艇の部品を作っていたが、生徒の中には国立倉庫に米がないのを見て敗戦を予感した者もいたという。

戦後も国立倉庫は稼働を続け、小中学校の遠足スポットにもなった。自らも遠足に来たという、山形農政事務所酒田庁舎の布宮利行さんは、「一応案内をされる方がいたのですが、遠足が集中すると、その対応に追われ、ほとんど仕事にならないとぼやいていました」と、当時を振り返る。

山居倉庫と共に、“米都”酒田の象徴であった国立倉庫だが、時代の流れによって、平成4年3月末日を最後に、ひっそりとその役目を終えた。

悪い景観？ 余計なお世話です

国立倉庫の業務廃止後は解体も検討されたが、堅牢強固が災いし、解体だけで約3億円かかることから、今もそのままとなっている。往時の姿を残しているといえば聞こえがいいが、実情は“ほったらかし”である。平成10年に、売却に出されることが決まったが、敷地だけで約5億円すること、倉庫も同時に買い取ること、分筆売却は行わないなどの要件から、未だに買い手のめどは立っていない。

ほったらかしにしておけば、当然、建物は老朽化し、損傷が激しくなる。また、見栄えも悪くなる。

折しも、平成16年に景観法が施行され、景観の良し悪しに社会が敏感になるなか、学者などの有識者によって「美しい景観を創る会」が結成され、日本全国における「悪い景観100景」を選定した。運悪く、国立

倉庫もその一つに“選定”され、寸評では「宅地近くの産業廃棄物」と酷評された。

しかし、景観というのは、そもそも見る人によって印象（評価）が異なるのではないだろうか？

国立倉庫に関して言えば、壁や柱が黒ずんで汚く見えるかもしれないが、これは「雲形迷彩」といって、戦時中に、敵の目を欺くためにわざと描かれたものである。いわば、貴重な戦争遺産であり、専門家が見たら驚嘆するかもしれない。

それゆえ、事情を知らない一部の人たちによって「良い景観」「悪い景観」が決められるのを、余計なお世話と感じるのは筆者だけだろうか。

時計の針が再び動き出す日

平成16年夏至の夜、国立倉庫の屋内が無数のロウソクで照らされた。「100万人のキャンドルナイト in さかた」のメインイベントである。なお、「100万人のキャンドルナイト」は、急速に原発建設を進めるアメリカのブッシュ政権に反対する、カナダの自主停電運動（平成13年）にヒントを得て、平成15年から全国で始まったものである。

また、同年10月には、酒田みなと倉庫（くら）祭りが開かれ、屋台のほか、フリーマーケットや琵琶・大正琴の演奏、出羽人形芝居などが催された。

しかし、国立倉庫の今後については、酒田港長期構想推進委員会などでも利活用が議論されているが、具体策は今のところ何もない。山形農政事務所も、当面は買い手が現れるのを待つだけだ。

ちなみに、映画「蝉しぐれ」のロケ隊が庄内を離れる際、たまたま国立倉庫を見て「映画のロケに使えないか？」と問い合わせたところ、安全性などを理由に当局の許可が下りなかったというエピソードもある。

とはいえ、悠久の歴史に思いをはせながら、いつ動き出すか分からない（あるいは永遠に動かないかもしれない）時計の針を静かに眺め続けるのも、案外悪くない。



「100万人のキャンドルナイト in さかた」の一コマ。倉庫内にひさびさに明かりが灯った。©SPOON

（荘銀総合研究所 研究員・山口泰史）